

# 放送人の会

NO・14

2003・1・15  
発行

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階  
Tel & fax 03-3221-0019  
E-mail info@hosojin.com

代表幹事 大山勝美 編集担当 伊藤雅浩、松尾羊一

## 「継」と「創」と「援」の年に

大山 勝美

2003年、この年の放送界を漢字でシンボル化すると「継」と「創」の年ということになりそうである。ことしはテレビ放送開始五十年目の節目の年にあたる。人間でいえば立派な大人で中高年の仲間入りだが、ゼイ肉もつき生活習慣病の症状状も散見される。しかし、その生命力はまだ衰えをみせそうもない。これが「継」である。

また12月には、東・阪・名の三大都市圏でテレビ地上波のデジタル放送がはじまる。放送の革命だという人もいる。放送機能は数段パワーアップし、放送の仕組みは構造的に大きく変わる。放送の概念の見直しを求められかねない。この問題は巨大なで詳述は別の機会にゆずるとして、放送人の会もことしは「継」と「創」の年になると思っている。

「放送人の証言」の収録は、テレビ五十年目ということもあって活字メディアからの問い合わせが多い。VHSにダビングしてあるので多方向から注目されるに違いない。

「名作の舞台裏」「放送人の研究」「Inter・Bee」「放送人グラフィック」「放送論研究」―いずれも好評で、ことしも期待されている事業である。第二回放送人グラフィック受賞者は誰なのか、今から胸がときめいている。昨年、手弁当のボランティアで開催された「全国地域ふだん着番組フォーラム」は、ことしから装いを新たに「全国・地域番組フォーラム in 横浜」として登場する。

共催は「放送番組センター」の了解をえて、現在は横浜市と交渉中である。窓口の経済局と接触した感じでは「横浜から全国へ発信する文化イベント」として企画を歓迎し、手ごたえは十分である。デジタル化はハードの面で地域・地方局を悩ませているが、放送の本命はソフトである。地域の制作者たちが一堂に会して議論しあい、番組を顕彰するというのはタイムリーであり、「超地域」の意義ある事業だと思ふ。

昨年暮の幹事会で盛り上がった課題は「若い会員をどう獲得するか」「現場との接点をどうもつつか」であった。まずは「何の役に立つか」会員のメリットを実感させる魅力的な企画を、いくつか用意することである。

例えば松尾幹事から「平成ラジオ部会」の提案があった。ラジオ出身の会員が、ある番組をとりあげ、制作スタッフと番組の方法論や技術論を膝つきあわせて公開の場で話し合う、という構想である。

実績ある何人かの放送のベテランを中心に、具体的な番組について車座になって参加者がフランクに議論

をたたかわす。「塾」的発想である。そんな放送人の会の「個人塾」が現場の若い人の注目を集めて、いくつも活動している。このイメージを、さらに現実味のある具体案に練りこみたいと考えている。

川口先輩から、いい言葉をきいた。「老婆は道を知っている」。別の言い方をすれば「温故知新」の道である。昨年の積み残しがいくつもある。忘年会で満島会員から発言があった。

「視聴者が感じる現在の放送の問題を議論すべきではないか」カレント・シンポ担当の石高幹事の鼎阪もあって、残念ながら昨年はパスしている。

このところのテーマでいえば北朝鮮拉致問題にみられる集中豪雨型取材、メディアスクラム、報道被害など、いくつも思い浮かぶ。テレビドラマの低調も話し合うべきだ。ことしはぜひカレント・シンポは手がけてみたい。

気がかりのひとつに「ホームページの休眠」がある。最初のセッティングがよくなかったのか、何人かが改訂出版を試みギブアップしている。「ホームページを見たら数年前のままで入会意欲を失った」という声をきいたりすると経費の問題どころではない。ことしは最優先で改善にとりかかりたい。

もつと気軽・気楽な内輪の会や関西支部を、などの「創」案は、いささか歯どめがない。これらが「想」のままに終わるかどうかは、会員の皆様方の積極的「援」の有無にかかっている。



# 平成14年度事業委員会報告

事業委員長 今野勉

平成十四年度の事業は、あと「名作の舞台裏」#5と「放送人の世界」を残すのみで、他は以下のごとく、精力的に遂行されました。

7・13「名作の舞台裏」#3「俺たちの旅」パネリスト・中村雅俊（出演）斎藤光正（演出）鎌田敏夫（脚本）岡田晋吉（制作）。司会・石橋冠。担当・石橋、荻野慶人

7・16「全国リフだんの番組リフォーラム」2002くローカルの知恵は無尽蔵」パネリスト・越前屋俵太（出演）酒井美樹雄（福井テレビP）村上雅通（熊本放送P）土屋敏男（NTV編成部長）澤田隆治（東阪企画社長）田中直人（テレビマンユニオン）碓井広義（同）清水東（作家）。司会・田原茂行。担当・田原、石井清司

10・5「テレビ開局50周年くテレビ放送への熱き想い」(日本放送芸術学会共催シンポジウム)パネリスト・合川明(元NHK東京)和田勉(元NHK大阪)池田義一(元NTV)。司会・大山勝美。担当・大山。山。

11・21「Inter Bee 2002シンポジウム」私が創る時代・劇

パネリスト・能村庸一(フジTV・P)浅野加寿子(NHK・P)小川治(テレビ東京・P)石橋冠(D)。司会・今野勉。担当・斎明寺以玖子

11・25「名作の舞台裏」#4「北の国から」パネリスト・杉田成道(フジTV・D)倉本聡(脚本)田中邦衛、吉岡秀隆、中島朋子(以上出演)。司会・石橋冠。コーディネーター・山田良明。担当・石橋、荻野

「放送人の証言」は、久野浩平担当で、大山勝美、各務孝を中心に引き続き収録を続けております。また放送番組センターと共同事業に関する覚書を締結しました。

## 「名作の舞台裏」

石橋冠

昨年は七月に「俺たちの旅」、十一月に「北の国から」と、ともに満員の盛況のうちに行われた。

前者は荻野慶人氏、後者は山田良明氏の奮闘もあつて豪華で理想的なゲストが揃ったことも要因であろう。本意である一般視聴者との対話も活発で、この催しの意義を充たしたと思う。放送番組センターの山田悠紀雄氏の積極的な協力にも感謝したい。年度計画としては、三月十五日にあと一回を予定しているが、何にす

るかには鋭意検討中です。

研究課題としては、会員諸氏の参加も増えてきたので、終わったあとにでもゲストと会員の交流と雑談の機会を作りたいと考えています。さて、

このことにも関連するのだが、外への催事もさることながら、内への催事が今後のテーマに思えてくる。

「放送人の会」がより発展し継続してゆくためには、会員相互の広範な交流が日常的に行われることが必要なのではなからうかと。

## 総務委員会報告

北村 充史

「放送人の会ウェブサイト」再制作の準備を進めています。一月の幹事会に概略設計図と経費予定を提出する予定。

## 2003放送人グランプリ

今年も「放送人グランプリ」のシーズンが到来しました。

ノミネート用紙を同封しましたので奮ってご推薦をお願いします。昨年の第一回は、産廃の豊島を執念で追いかけ、ニュースやドキュメンタリーをつくり続けた山陽放送報道部の曾根英二氏へグランプリが贈られ、特別賞に故萩本晴彦、石橋冠の両氏へ、そして特別功労賞が梅棹忠夫氏へ贈られて話題を呼びました

今年の第二回も要領は昨年と同じです。候補者は会の内外を問わずこの一年、放送(ラジオ・テレビ)で、最もすぐれた仕事をしたと思われるひと。ノミネートできるのは放送人の会の会員に限ります。

原則として、グランプリは一名、その他の賞(特別賞、奨励賞、など自由にネーミングして下さい)は二名までです。推薦の受付は、二月一日から三月十日迄。事務局へFAX、郵送、メールなどで。テープなどの資料があれば添付して下さい。

一月幹事会で、五名の選考委員を決め、ノミネート集計を重ねて決定されます。贈賞式は、五月の定時総会の予定です。

# 放送人・2003アンケート特集

俗にまだはもうなり、もうはまだなりとか。ラジオが七十九歳、テレビがちょうど五十歳。言うならば古老か熟年の皆様がたどった道。放送よ、お前はもうであり、まだなのか。

いずれにしろこしかた行く末を慮る2003年が明けました。放送への過去・現在・未来にかかわる感慨をと、アンケート特集を試みたところ意外（といつてはなんです）玉稿が続々集まりました。ありがとうございます。 会報編集部

◎印……あなたにとって放送とは？

☆印……記憶に残るあの頃の書籍や映画、舞台などをいくつか。 (なお、アンケートは順不同、到着順であり、略歴記載の有無、記述の体裁などは生原稿を尊重しました。)

## 塞河江正

(TVKエンタープライズ・プロデューサー 武蔵野美術大学非常勤講師)

◎昭和21年の秋。北朝鮮にいた私達日本人は、故郷日本へ帰国するためには38度線突破を陸上か、それとも海上脱出するかを選択に迫られた。私達一家8人(父は医師のため身柄を拘束)は後者を選んだ。その時、遠い日本からのラジオは海外居在留邦人(中国、台湾……)の引き揚げのニュースを伝えていた。中学一年生だった私は敗戦という同じ体験をしながら、北朝鮮在留の日本人だけが、なぜ自力で脱出しなければならぬのか、直感的におかしいと何度か思った(朝鮮半島分断のニュースは知ってはいたが)。

今、拉致に揺れる北朝鮮のニュースを目に耳にするたびに情報の伝達には、(なぜ)の問いが常に秘められていることに気がつく。平成15年で私はラジオ、テレビの現場生活は44年になる。

☆1『現場からのテレビ番組論』(ノーマン・スワロー著 大谷堅志訳) 2『比較文化への視覚』(加藤秀俊) 3『日本人と日本文化』(司馬遼太郎 ドナルド・キーン著) 4『ぐびじん草』(大岡信) 5『情報産業論』(梅棹忠夫) 6『モノと日本人』(栄久庵憲司) 7『ことばを読む』(井上ひさし) 8『ヒロシマ・ノート』(大江健三郎)。映画『青い山脈』『楳丘節考』『愛のコリーダ』『ラストエンペラー』『舞台オペラ(源氏物語)』(三木稔作曲)マライア・キャリー コンサート。

## 北村美憲

◎まったく偶然にありついた「生業」でした。大学を出たとき、食うために何かをしなくてはならない不運を嘆きながら、不本意ながら自分に許されるのは、牢屋に入るか会社に入るか、どっちかだと考えて、どちらかと言えはいくらか楽そうな会社に入ることにしたのだが、探ってくれそうな所は何処にもなく、たまたまありついたので「ラジオ東京」だった、というだけのことです。

放送についての期待も自覚もなにもなく、入ったその日から何時辞めようかと考えていたのですが、思いがけず生きのいい明治生まれの先輩たちにくぐり会って、「こならわたしでも勤まるかもしれないと思いなおし、しばらくしたら最初にわたしが心に描いた放送の姿が、不当に歪んでいくように思われ、それに自分自身なにかしかの責任があるように感じられて、とつおいつしながら45年ちかくも付き合ってしまった。今日に至ったという次第。

☆これまでに影響を受けた本、映画、舞台……は、おそらく数限りなくありましよう。どれ、と言われても困りますが、いま思い返して浮かんでくるのは、本では、カール・マルクス『経済学・哲学手稿』、花田清輝『復興期の精神』、滝口修造『近代芸術』。映画は『無防備都市』(ロベルト・ロッセリーニ)、『恐怖の報酬』(アンリ・G・クルーゾー)、『天井座敷の人々』(マルセル・カルネ)など。舞台にかぎらないが、ベルトルト・ブレヒトの一連の戯曲。いずれも放送局に入る前からのものです。

## 明神正

◎駆け出しの頃は、ラジオのニュース原稿を書いていた。気がついてみると、テレビの視聴率1%が1118万人(全国規模)の時代になっていた。そして今や多チャンネル時代。自ずと視聴の形態も様変わりしてきた。巨大メディアと取り巻く環境は変貌の一途である。

☆細川護貞『情報天皇に達せず』(58年)で、異次元の世界を知り、P・パーワイズ&A・エーレンバーグ著『テレビ視聴の構造』(91年刊)で「テレビの本質」らしきものを知った。

## 上野満

(大阪芸術大学短大非常勤) ◎公権力の束縛を受けず、大衆に社会的メッセージを伝達する「ジャーナリズム」だと思えます。それは民主主義の基幹であると考えられるからです。戦前の放送は、事実上国家の意思伝達機関、戦後は占領軍の支配下にありました。放送法が生まれ、ラジオにジャーナリズムの芽生えがみられました。私が放送界に入った1955年ごろのテレビは普及のため娯楽全盛の時期でした。テレビがジャーナリズムになり得たとき、その影響力は大衆が社会現象を判断する大きな力になると考えました。以来ドキュメンタリーを志し、微力ながらさまざまな社会的メッセージを伝えることで、私なりの考えを貫いてきたと思っています。

☆1NHK第一放送「時の動き」汚された不知火海(昭和32年)水保病を初めて全国に告発した熊本発のラジオ番組。放送のあり方に強い影響を受けた。

2. NHKテレビ「日本の素顔」(奇病の  
かげに34年)水俣病をテレビで最初に  
取り上げた。患者の側に立った制作姿  
勢にドキュメンタリーの原点を見る。

### 松前洋一 (映像プロデューサー)

◎ 学校を出て初めて得た職場がテレ  
ビでした。昭和38年、電通ラジオテレ  
ビ局です。テレビはまだ草創期といっ  
てもよい時代でしたし、既成概念の無  
い職場だけに、後先を見ずに動いてい  
ました。領域はやがてテレビ番組から  
スポットセールス、CMにいたるまで  
全方位の毎日でした。スポンサーやテ  
レビ局、そして芸能界を7、8年まわっ  
ているうちに番組のプランニングやプ  
ロデュースの現場に身を置くようにな  
りました。そのまま今日にいたってお  
ります。テレビとは、わたくしにとって  
「自由」と「日常」そのものであります。  
その間わたくしが深く関わり、忘れ難  
い作品を挙げておきますと、テレビ＝  
青島幸男主演「意地悪ばあさん」(67  
年)、中村敦夫主演「木枯し紋次郎」(72  
年)、映画「藤田正浩監督「泉の城」(99年)  
☆ 田村隆一詩集「四千の日と夜」、司馬  
遼太郎さんの全作品。

### 荻野慶人

◎ 敗戦中学一年(でゼロにリセット  
され、青春期を古今東西の映画演けで  
育った僕は、25歳で撮影所を巣立って  
からも映画コンプレックスから抜け切  
れない。TVスタジオでも、映画に追いつ  
こう!」映画にない切り口を「と  
意識過剰で終始した。  
70歳近い視聴者としては、力作と思

しきもの以外はドラマを観なくなっ  
て久しい。部屋が明るく、電話の音や手元  
の新聞に気が散るからだ。食指は報道  
番組(ディベート、スポーツを含め)に  
向いてしまいが、これも新聞など活字  
で追認しないと気が済まないからか。  
TVは40年も僕の生活をみてくれた  
「養父母」なのに、楽天的すぎて危なっ  
かしくみえてならないのは、腰に傷も  
つ我が身のせいか。

☆ (青少年期・中年期・最近と分けて一  
篇づつ) 本「宮本武蔵」(吉川英治)、  
「立川文庫の英雄たち」(足立巻一)「タ  
レント文化人150人斬り」(佐高信)。  
映画「モダンタイムス」(チャップリン  
監督)、「あなただけ今晚わ」(B・ワイル  
ダー監督)、「カンタハール」(M・マフマ  
ルバフ監督)「舞台「マクベス」(W・シェ  
イクスピア作)「俳優座」、「ロボット」  
(K・チャベック)「俳優座」

### 松尾羊一 (放送物書屋)

◎ 作る造る創る(真似する)「勤る  
(営業)為る(成遂)。さまざま「つく  
る」の現場から、惚れたが悪いかと傑  
作佳作快作奇作凡作駄作悪作怪作数知  
れず、高揚と挫折がつきまとい、集まり  
散じて栄光と悲惨の職人たちが職を  
「三日やったらやめられぬ」とか。  
深川木場は材木商の伴は後年「往事  
茫々、出入りの職人の仕事を見つめて  
いると涙が零れたもの」と記した(如  
是閑長谷川萬次郎)。堅気にて遊び人の  
放送極道50年、放送人の輪の中に孤高  
の職人を捜す日々であります。  
つくる...いい言葉だと思えます。

☆ 戦前。例えば「亜細亜の曙」「紅顔  
美談」(峯太郎、紅緑)に落語全集、  
少年講談全集など大日本雄弁会講談社  
の本たち。嗚呼、貸本屋文化である。

往事。映画は「風雲将棋谷」(坂東妻三  
郎)「路傍の石」(片山明彦)「若い人」  
(市川春代)「人生劇場」(小杉勇)。  
戦後は「仁義なき戦い」本。乱読淫読  
斜読の日々とぞ亡羊の嘆いにして、一  
挙げるとすれば「お前はただの現在に  
すぎない」(田畑書店 69年)。テレビは  
「前略おふくろ様」(75年)や「高校教師」  
(98年)など昭和を投影した神史的作品。

### 石橋冠 (フリー・演出)

◎ テレビは「永遠の青春」...いつまで  
たっても届かぬ不良少女への愛。多く  
のトライ、多くの挫折。とり返しにつか  
ない過ちの連続。ああ、早く年齢相応  
の成熟をわがものになりたい。

☆ 舞台。アーノルド・ウェスカの「調  
理場」(文学座)。映画は「ローマの休日」  
にトリュフォの「突然炎のごとく」、  
フェリーニの「ローマ」、ゴダールの「男  
と女のいる舗道」、そしてC.ルルーシュ  
の「男と女」。本は、花田清輝の全著作。

大和定次 (音響効果・音響デザイン)  
◎ 私にとってラジオ・テレビとは「音  
響効果」という天職を半世紀(テレビも  
50年にわたり育み、そして勤ませてく  
れた神聖なるメディアだ。  
ラジオは「音」が全てだ。映像と音響の  
情報伝達量は「映像4、音響6」という  
研究もある。テレビもそうだろう。ドラ  
マ、ドキュメンタリーやバラエティ  
など、音響がなければ番組は存在でき

ないのだ。若いテレビマンよ、これから  
のテレビは音で勝負だ。映像は肉体、音  
はその精神だ。

☆ 本では邦名「ベルナルル・クーパー  
ラジオ演出読本」(高橋太一郎訳 日本  
放送出版協会 昭和25年9月10日発行)

### 滝大作 (脚本家)

◎ TVは人間より面白い。そうでなかっ  
たら部屋隅に人間を立たせておくは  
ずだ。これはイギリスのユーモア作家  
の言葉です。ご本人はアイロニーなの  
かもしれないが、TVがそれだけ期  
待されて誕生したことも事実でしょう。  
私も期待派の一人で、TVに不可能  
はなく、必ずや事実を映し出す鏡となっ  
て、人々の暮らしを豊かにすると信じ  
ていたものでした。しかし、いまや私は  
部屋隅にはTVより人間を立たせな  
くなってしまいました。TVは、この國  
の閉鎖的な社会の中で窒息死しつつあ  
ります。私にとっていまのTVは、風景  
を映し出すデジタルハイビジョンTV  
ではありません。それを楽しんでいま  
すが...

☆ 本「お前はただの現在にすぎない」  
から始まってマクルーハンなど。いま  
はノーム・チョムスキーの「アメリカに  
報復する資格はない」など。舞台 他人  
の舞台ではなく、自らの舞台やトーク  
ショーで客前に出たことがTVをつく  
るのに、いちばん役立ちました。

### 北川泰三 (京都学園大学助教授)

◎ オーバーな言い方をすれば、私にとっ  
ての放送は「人生そのもの」です。国民  
学校一年生で「大本管発表」の開戦ニ

ースを聞いて軍国少年になり、5年後の疎開先で雑音だらけの「終戦の詔勅」を聞いて虚脱状態に陥り、中学時代の「プロ野球中継」で川上・青田に熱狂する野球少年になり、高2時代に開局した民放ラジオの「S盤アワー」に「これだ、僕の生甲斐は」と身震いするほど魅せられたのが運のツキ（「尽き」ではなく「付き」）で、同志社大学（クラブ活動は放送部）から京都放送（制作と放送一筋）を経て、現京都学園大学（テレビ放送論）に至るも、未だ放送とは縁が切れない。放送芸術学会と放送人の会で放送研究させて頂いて、放送演じて終わるのでは。

☆『エイゼンシュテイン全集』（73年、84年）映画は『戦艦ポチョムキン』（エイゼンシュテイン監督 25年）

佐藤利明 （テレビマンユニオン）

◎ テレビを見て感動すると、いつも

「一期一会」という言葉を思います。何か同じ感動を二度と味わえない気がするのです。子供の時の記憶が甦ります。私が小学校へ上がる前ですから1930年代半ばです。自宅前の舗道に寝そべって、よく蠟燭で絵を描いていました。そのコンクリートがとても滑らかだった所為もあるのですが、私にとって素晴らしいのは、誰憚ることなく思いのまま、好きな絵が描けるところにあったようです。ある日の夕方、荒波を蹴立てて進む見事な日本海軍の軍艦が描けました。この時の興奮と感動は覚えようがありません。あまりの出来栄えに去りがたく、夕食をと呼ぶ母親の声を聞き流し、人通りが絶え

りが真っ暗になるまで見守っていたほどでした。絵は翌日には跡形無く消されていて、まさに「一期一会」でした。

今でも番組を撮っている最中、遙かな子供時代のことを思い出しています。そこで、テレビとはなにか、ですが私の答えは「一期一会」ということになりましようか。

岡田晋吉

◎ あるシンポジウムで同じ問をぶつけられ「解りません」とこたえました。

また別のシンポジウムでは「飯のタネ」とこたえました。あなたにとってテレビとは？と聞かれる事は本当に苦手です。青春を承知の上ならば、はなはだ個人的ですが、「青春の再体験が出来た場所」とでも言いましようか。

☆本…1950年代のアメリカの探偵小説。松本清張の『黒い画集』映画…ジョン・フォードの一連の西部劇に『アリット』舞台…劇団四季から日本語の美しさを、テアトル・エコーから喜劇を。テレビ…1960年代のアメリカ製作のテレビ映画。

川竹和夫

◎ ラジオ時代は新聞記者に交じって放送のニュース取材をしていた。記録性のない、解説性の乏しいラジオニュース。充足感の得られない日常だった。特に経済記者だったので…

テレビ時代。私は初期のテレビワイドニュースのフォトマット作りに専念した。映像と音声を駆使、速報性を最大限に発揮し、アンカーの起用で解説性を加えて、新しいテレビジャーナリズム

の創造に情熱を燃やした。しかしその後の状況は、当時の期待どおりではなかった。記者の書く原稿、現場からのコメントは昔の新聞原稿そのままだ。民放のワイドショーは新聞記事の紹介、後追いに終始している。報道の娯楽化は進むが、テレビジャーナリズムは後退の一途である。

梶田良子

（共同テレビジョン・ドラマ部長）

◎ 自分はテレビドラマの制作に参加していますが、自分にとって、テレビドラマは、フィクションの形をとったノンフィクションの世界の表現であると思います。

ドキュメンタリーではない、映画のように限定された世界を押しつけるでもなく、ちょっとだけ非日常の表現の中でこそ、むしろみえてくる真実や事実（ノンフィクション＝人間の本质）。

そこには、夢もロマンも、手に届く位置にある、と思うのです。そしてその非日常を造形していく過程で、自分自身もフィクションとノンフィクションの間に遊離することができ、そんな気がします。

宮脇敏雄

◎ テレビは「諸刃の剣」ということが、改めて確認される。扱う人によってそれは凶器であるということも充分知っていないければならない。ところが、そうとは言えないところに問題がある。凶器を愚人に平気で渡してしまっている。放送関係の経営者たちに罪がないとすれば、それは本人全体の教養レベルの

低さを証していると考えざるを得ない。  
☆『失われた時を求めて』（ブルースト）  
加納孝夫

◎ 昭和32年入社私にとって創成期のテレビとは若さを思いっきりぶつけられた理想の環境だった。モノクロからカラーへ、ENGからSNGへと技術的大革新に身をゆだね乍ら、現場技術者として限りない可能性を使命感に支えられて、スタジオや中継現場でレックスをのぞき、アカリを当て、スイッチャーをタイテ仕事をした。生まれ変わったとしても、二度とこんな環境にはめぐまれないだろう。私にとってテレビとは「青春そのもの」である。  
☆『テレビジョン工学』（フィンク著）  
「テレビジョンの制作技術」（プレッツ著）この二冊は座右の書だった。

鈴木昭典 （ドキュメンタリー工房）

☆私たち世代にとって、放送は信頼すべき存在でした。最初の放送との出会いは強烈で、大本営発表と空襲警報のラジオでした。それが天皇の声によって裏切られ、疑いをもって視聴するメディアに変質しました。創り手になって、メディアは非常な権力者だと知りました。カメラを向けると、私個人に話す人などいません。検証ドキュメンタリーを作っている私にとって、証言をどれだけ信頼するかは常に課題です。実際、マッカーサー自叙伝の信頼性の低さは象徴的です。最近公開された天皇語録も、別の意味で疑問符がついています。20世紀史の新事実発掘が、未だにニュース性を持っていることを考えると、情報の隠蔽は日々生産されている

るはずで、放送によって政治が動く時代に戦慄を覚える昨今、検証番組の出番がない時代は来ないでしょうか。

☆私の場合、殆ど出会いです。1964年の『ジャビント』は、前年のインドネシア取材の通訳が残留日本兵でしたし、最近の『日本国憲法』は、故ケーティス大佐に直接アタックしました。殆ど、自分が生きた時代を知りたいというのが動機ですが、昭和史資料は、集めるのが趣味でした。映画で言えば古いですが、『生きる』『ビルマの堅琴』や『戦場にかける橋』でしょうか。

社会への不満が多い時代と共に歩いてきたものですから、『環境問題』や『人権裁判』など、必然的に社会的なテーマと取り組む機会が多く、その傍らで次々と出現する新しいテーマに触発されました。例えば、『心臓移植』、『遺伝子』、『深海科学』などですが、ネタもとは、熱中して読んだ新聞でした。

### 荻野靖乃

◎結局、青春もしくはその延長だったのしょうね。たまたまやっていたメインの番組がある時期『若い世代』『若い広場』という教育テレビの番組だったので、毎回若い人となぐりあわんばかりの喧嘩をしながら制作してました。三浦雅士の『青春の終焉』は、60年代で青春という言葉は死語になったというのがモチーフですが、印象深く読みました。それにしても、個人的には、随分心情過多の番組を作り続けていたようです。

☆本、吉本隆明『共同幻想論』言語にとって美とはなにか』などの著作……

映画。オーソン・ウェルズ『審判』トニー・リチャードソン『ラブドワン』。テレビでは、大島渚『忘れられた皇軍』今野勉『七人の刑事』舞台。アーノルド・ウエスカー『キッチン』

大原れい子（テレビマンユニオン）  
◎「時間の私物化」です。  
切実でウシロメタイ……

### 児玉孝光

◎私にとってラジオとは、単なる音声メディアだけではなく、人間としての温かい血の流れた人間性の送り手と受け手の垣根を越えた人間メディアだと考えています。したがって貴会に入会を希望した動機も「放送の原点は人間」という言葉に惹かれたからです。

世の中、デジタル機材やマニュアルが全盛で、結構私もデジタルの便利な製品は使っていますので、決してそれらを否定するものではありませんが、デジタルやマニュアルをどううまく使うのかの主役は人間であって、便利なデジタル機材に頼り切ったマニュアル通りにやっていけば良い、という何か人間としての創造性や独創性が段々放送の現場でも希薄になっていく危険を感じます。

☆「ニュース・ショーに賭ける」(浅田孝彦)「木島モーニングショー」の誕生を書いた本。映画 昔のアメリカ映画で描かれる米軍ラジオ局の取材場面。放送 終戦直後の進駐軍放送(FEN)。事件 大阪千日前デパート火災。大阪天神橋6丁目(天六)の地下鉄工事ガス漏れ事故。

木村成忠 (東北放送ラジオ局)

◎ラジオとは、1自己表出の手段  
2自己探索の手段 3メシのタネ。  
ラジオの制作にたずさわって26年、その前にラジオ営業セクションを約8年経験している。計34年、ラジオと共に生きてきた。自ら強く望んでそうしてきたのだが、ラジオは性(しょう)に合っていた。最近専ら企画を出してそれを若手が作るやり方でしか「自己表出」はできないが……。チャンスがあれば、取材・演出などすべてやってやるという気概はもっている(つもり)なのですが……。

☆本では「精神分析学」(フロイト)、「海辺の光景」(安岡章太郎)ほか「第三の新人」の作品。映画は生家の裏にあった映画館「亀楽座」で観たチャンバラ映画のすべて。

### 秋田完

(前ATP専務理事)

◎自分が伝えたい映像表現の舞台であり、他の人より少しでも先を走りたい競技場でもありました。しかし、よく考えてみると、その客席に観客がいたのか、その人たちがどう受けとめてくれたのか、判らないままの一人よがりだった気もします。それでもテレビが一番輝いていた時代に、その場に参加出来たことを幸せに感じています。

☆映画「2001年宇宙の旅」(スタンリー・キューブリック)  
舞台 滝沢修「炎の人」

### 穀内広之

(毎日放送)

◎少し考えてみましたが「テレビ」って、それ以上でも、それ以下でもなく、

比喩でたとえられるものでもなく、私にとってテレビって……テレビです。……すいません。

☆テレビ「サンダーバード」「刑事コロンボ」「ふぞろいの林檎たち」「男たちの旅路」。映画「七人の侍」「砂の器」「ステインク」「ダイハード」「プライベイトライアン」

### 中津川輝夫

◎テレビはあらゆる意味において人間を墮落させるものである(勿論私も)。1. なせなら「良い」ためになる「番組より「面白い」くだらない」番組の方がもてはやされており(つまり悪貨は良貨を駆逐)し、しかも「表現の自由」の名のもとに誰も悪貨を駆逐できない。2. 一度見始めたらいつまでもやめられなくなり、努力しなくても情報がどんどん入ってくる(つまり人間を受け身にすする)3. そしてテレビの影響力が圧倒的に大きいゆえに、テレビ制作者は、そうでない人々より一段高い所にいるような錯覚をおこさせている(テレビ制作者の特権意識)

☆本「文明は死の行進を始めた」映画「ガンジー」「遠い夜明け」

### 勝部領樹

◎テレビは、わたし自身にとっても、日本や世界の多様な変容ぶりを居ながらにして見ることが出来る便利な情報源の窓。世界の茶の間にとっても役割は同じのはず。

ただし、この窓に何を投影するかは、送り手の力量次第。世の動きが複雑急であるほど、テレビマンの論より証

脚の取材力や切り口の鋭さ、深さ、復眼の視角が試される。

赤狩りマッカーシーの異様性をテレビで告発したエド・マローが一九五八年に「自らの役割を果たさないテレビは、真空管と電線がつまったただの箱に過ぎない」と強烈に皮肉ったが、その呪縛から逃げられぬOB(わたし)はこのところ「窓」の中身にハラハラするばかり(失礼)。

☆本。「ニュースキャスター エド・マロー」「大統領の陰謀」(B・エドワードほか)「現代ノンフィクション選集」(全12巻) 映画。イラン映画「カンダハル」(9・11テロの前年にタリバーンの圧政を告発した。事件。連続テロ。拉致。イスラム世界の動きほか)。

### 各務孝

(環境テレビトラスト日本委員会) ◎ サラリーマンプロデューサーとして身すぎ世すぎで放送界で仕事をしていた者が口幅ったいことを言えた義理ではないが、私にとって放送は何かしら反面教師的存在であり続けている。民意に基づき最大多数の最大幸福を追求するテレビは、ステレオタイプの報道やドレンディードラマを生む上で多大の寄与をしたが、他面少数意見やマイナーな文化は惜しげもなく切り捨てた。その結果、いわゆる自主規制の名の下に、テレビが敢えて無視、あるいはタブー視しているものが何なのかを知る事が、とりもなおさず日本の現状をあぶり出す上で大変役立つよう思う。例えば、天皇制、差別用語、同性愛 etc、

☆本。中野重治、大岡昇平、伊丹万作 映画。「灰とダイヤモンド」テレビ。「忘れられた皇軍」。社会的トレンドにベトナム戦争、ソ連東欧の崩壊、元氣印の女性たち。

### 佐々木欽三

◎ 私にとってテレビとは、私の人生をゆさぶる事件でしたが、生涯伴侶とはなれないメディアです。テレビは巨大メディアであり過ぎます。お茶の間に入り込んで優しそうな顔をしていますが、本質は違います。テレビによる表現活動は放送局という巨大な装置なしには出来ません。装置の巨大さだけではなく、費用を調達する特別な社会システムはよくも悪くもアマチュアリズムを寄せ付けません。制作だけを考えたテレビ局の認知を受けた製作会社は、庇を借りなければ参入できず、手堅な自費制作は不可能です。せめてラジオのような手堅さ、内面性があつたらと思うのです。

あらゆる表現活動には年齢的ハンディがあります。人間関係を含めて、巨大機構に精通し続けることは年齢的にもハードルは高いでしょう(巨匠として特別な名声を得ていれば別ですが)。生涯伴侶とはなし得ないメディアだと思っています(捨てられる前に別れた方がいいのかも)。

☆(本)R・ラディゲ「ドルジェル伯爵の舞踏会」(映画)「舞踏会の手帖」 「天井座敷の人々」(舞台)「鹿鳴館」

### 大蔵雄之助

(杉並区教育委員)

◎ 放送は生活費を稼ぐための場だったと言えは身も蓋もないが、やりがいのある仕事としてそれなりに十分満足しており、充実感もあった。だが、退職して外部から接すると、メディアは身勝手であり、マフィア的集団の要素を含んでいるという印象がある。

自分に縁の深いニュースについて考えれば、例えば湾岸戦争の時に、誰が、どのような発言をしたかはすべて記録があるのだから、それが妥当であったか、当たっていたか否かは簡単に検証できるはずであるにも拘わらず、断定的に大間違ったの推測を下した人たちに今も臆面もなくコメントさせていることは、番組制作者としては著しく怠慢であるか、馴れ合いを演じているのか、の批判は免れない。

☆ いろいろあり過ぎて困るので活字に限る。少年時代の一冊の本を挙げるならば、岩田豊雄「海軍」その後少し古いところでは、ロジェ・マルタン・デュガール「チボー家の人びと」ジョージ・オーエル「1984」、古田武彦「邪馬台国はなかった」、佐野真一「遠い山びこ」、神坂次郎「今日われ命ありて」。最近では呉善花「韓国併合への道」。

### 土門正夫

◎ それは職業であり、仕事以外の何もありません。私は、この設問の仕事が余り好きではありませんし、そこから何を求めようとしているのかもわかりません。

従ってこの答えしかできません。  
☆ 失礼ながら、この設問の意味も私にはよくわかりません。影響を受けたものとは、その時々すべてであり、その積み重ねが今の自分であると思っております。従って、それは無限です。

### 楠美昌

(前国際放映 前東宝)

◎ 私にとってテレビとは何だったのか?と過去を振り返りますと、1956年に映画会社に入社しましたが、私の叔父の川原政太郎(テレビのハードNHKの朝ドラマにも取り上げられました)は「美昌君、映画の進歩よりはTVの進歩のほうが早いぞ」「これからの時代はテレビに変化して行く」と言われて自分のすむべき道を間違えたとの不安が頭をよぎりました。2000年に会社をやめ、フリーとなり、勝手気ままに過去の作品の再出版や、TV、舞台の制作にと案外忙しくしておりますが、1958年から2001年迄のTVプロデューサー活動で数多くの作品を残して来ました。

今、表題のテレビとは何だったのか?には回答しにくい問題です。常に創造力、創作力、そして勇氣ある行動力、それらが視聴者にどのように影響を及ぼすのか、ということよりもTV会社が如何にポロ儲けして来たのか、これが私にとってのテレビとは?です。

### 田原茂行

(常盤大学講師)

◎ 私という人間と社会をつなぐ絆。  
☆ 鶴見俊輔の「限界芸術論」その他の全著作。雑誌「思想の科学」。映画 黒沢



明「我が青春に悔いなし」。演劇三好

十郎、久保栄の戯曲、劇団、舞台……

堀川とんこう (テレビ演出家)

◎人間ウォッチングの手段、自分隠し

(「自己表現」の場。表現というのは、  
どうも僕の場合、自分隠しのような気が  
します。)

☆映画「旅芸人の記録」(アンゲロプロ  
ロス)。小説「スチル・ライフ」(池澤  
夏樹)

川口幹夫 (NHK名誉顧問)

◎青春そのものでした。なにしろ若かつ

たし、テレビについてよく知らないし、  
でも何かとてつもなく大きくてすごい  
ものに見えました。私はそれを自分の  
ものとして扱うことが出来たのです。

たとえば女性に惚れて、この素晴らしい  
乙女と家庭を作ろうと思ったような  
ものです。だんだん現実はその夢を小  
さくしてきました。でも、私はまだ夢  
を失いません。

☆ブルターク「英雄伝」、倉田百三  
「愛と認識との出発」。黒沢明の映画、  
木下恵介の映画。イングリット・バー  
グマン出演の映画。

村木良彦

◎見世物から出発したテレビは、やが  
て自身が情報環境をつくり出すようにな  
り、ついには現実と虚構が倒錯する  
社会を生み出してしまいました。

情報の洪水の中での飢餓感の増大、マ  
スコミ依存と不信の交錯、テレビは放  
送開始から一直線にこの道を走ってき  
たように思います。

この道の内外で、「テレビとは何か？」  
と問うプロセスが私にとってのテレビ  
でした。これからも、しなやかでした  
たかな異端の存在でありたいと思っ  
ています。

☆刺激を受けた本。

1「ゲリラ・テレビジョン」(マイケ  
ル・シャンバーグ、レインダース・コ  
ーポレーション) 2「テレポリックス」  
(フレデリック・D・ウィルヘルムゼン、  
ジェーン・ブレット) 3「イスラム報  
道」(エドワード・サイード)

清水満

◎昭和30年にNHKに入局して、テレ

ビ一筋にやってきた私にとってテレビ  
は人生そのものです。バラエティー、  
ホトムドラマ、時代劇などあらゆるジャ  
ンルのドラマ番組を制作してきました  
が、そこには常に自分自身の生きさま  
が反映していたように思います。事実  
にもとずいたドラマの取材で、他人の  
プライバシーに踏み込まねばならない  
時など、とくに自分との対決を迫られ  
ました。今、なにかと表現の自由が問わ  
れています。ドラマはフィクション  
ゆえに真実に近づけると同時に、何で  
もあまりの危険性を含んでいます。ドラ  
マだけでなく、テレビはもっと冷静さ  
と謙虚さを持つべきだと思います。

☆映画は小津安二郎の作品や中国、イ  
ランの作品。事件では医療過誤問題。  
舞台では井上ひさしの作品。  
書籍は移民関係。

田中昭男

◎文学作品に拠り自分の思いの表現

を志望していた私が、たまたま師・菊田  
一夫先生のすすめで放送の世界で演出  
を手掛けることになったのは、昭和29  
年、ラジオ・テレビの世界で、まさに50  
年を過ごした訳です。その間に社会の  
変化、技術の進歩にもまれて放送の世  
界も大変身しました。その間特にテレ  
ビにより情報が世界の隅々にまでとど  
くようになったことは革命的な功績だ  
たと思います。その反面商業主義が見  
境なく飛び込んで来て、それに加担し  
て現在の日本の嘆かわしい状況を作る  
事に放送が犯した罪も大きいものがあ  
ると思います。政治、社会、教育、社会の  
罪を責める事はできません。同罪だと  
思います。極端に言うとう、私には技術  
的な発展はもう必要ありません。この  
世界に飛び込んだ初期にお付き合い  
いただいた小説家、詩人、脚本家、演出家、  
その他のスタッフの方たちもあってい  
た「心」が貴重に思われます。あの人達  
は集団に組する事なく、夫々の個人の  
心や良心に従って、悩み悲しみ、喜び怒  
っていました。その思いが、いまの放送界  
にも欲しいのです。

喜びました。  
ハードを制するものはソフトをも制  
すとはかりに、新しいテクニクを駆  
使してのドラマ作りは生甲斐そのもの  
でした。

作る側から見る側にまわった現在、作  
り手の熱気が伝わってくる番組が少な  
くなったと感じます。いい番組は確か  
にありません。それを探す時間が惜しい  
のです。半世紀経ったところで改めて  
心の糧となる番組作りを期待します。

◎本。「論語」(孔子)「風姿花伝」  
(世阿彌)。演劇。「わが町」(ソ  
ン・ワイルダー)(昭和30年前後、大阪  
の五月座公演、三越劇場)

坂元良江 (テレビプロデューサー)

◎テレビはまず、生きて行くための仕  
事です。そして伝えたいことが伝えら  
れる私にとって一番有効な手段です。

☆本。ポーポワール「第二の性」  
映画。ゴダール「勝手にしやがれ」  
テレビ。「私は貝になりたい」「ベト  
ナム戦記」

鈴木典之

◎作家の小林信彦氏が、TV構成作家  
の中原彦彦時代を回顧した「テレビの  
黄金時代」(文芸春秋社刊)で、「テレビ  
の黄金期は創業から20年で終わったと  
いっているが、同感だ。彼はバラエティ  
番組作りのことをいうのだが、ほく  
も必要があって60、70年代当時のこと  
を調べてみて、今のテレビ番組の原型  
がすべて揃っていたことに驚いた。同

土井原作郎 (大阪芸術大学教授)

◎放送とは青春時代の働き場所その  
ものでした。1957年から言えば  
テレビがナマからVTRの時代に入る  
まさに躍動期……。うしろを振り向かな  
い、否、振り向いてはおられない。まっ  
しぐらに走り続けた充実感忘れ得ぬ

……

時に、そこにみなぎるエネルギー、な作り手の創意と視聴大衆の受容との、牧歌的な蜜月ぶりを感じ、新興メディアのパワーと信頼性の、これが絶頂期ではなかったかと思つたものだ。アイカイブ番組を目にする昨今も、その印象は変わらない。

50年経って、テレビは夜郎自大風に巨大化した、その実、内輪の消耗戦に七転八倒するマンモスではないのか。IT革命と多メディア化の更なる進行は、圧倒的な影響力の分散・限定へと作用しそうだ。テレビは何を依りどころとすればいいのか。

ぼくはラジオで育つて「ことば」を重視しているので、テレビを過大視はしない。だが、優れたコンテンツの影響力は信じる。番組批評にたずさわるのも、「時代の文化」を支えたいと思うからだ。

大事なのは時代批評眼だろう。だからぼくが触発されるのは、個々の番組に向き合う紙誌の論評記事だ。身近かな例でいえば、松尾羊一氏の洒落な「放送物書屋」ぶりには目が離せない。その実践的な時代批評眼の鋭さと深きこそ、放送現場を鼓舞するものだと思うからだ。作り手を支えるのは高踏な理論ではあるまい、と思う。

☆ 作家・阿久悠氏の流行歌作品。

万華鏡のような作品群の中に光る硬骨・鋭敏な時代批判の目を意識し、折々刺激された。「時代の飢餓感にボールをぶつける」と語る表現姿勢に共感し、自らの営為への支えの一つとして来た。

アンケート集の作業を終えて

一位 テレビをつける。二位 冷蔵庫をあける。三位 部屋の窓をあける。以下 クーラーか暖房のスイッチをONにする。留守録を見る……

「帰宅して最初にすることはなんですか」。さる住宅会社調査部の独身女性へのアンケートの設問1のアンサー順位である。

ただなんとなく癖で冷蔵庫をあけたら、激んだ空気を入れ替えるためというより夜空か下界を眺めている「わたし」。いかにも都会の独り住まい気分が見え隠れして興味深い。

それにしても断然一位は（へつ）に見るわけでもなく（げ）なく）テレビをつけてしまう「わたし」なのである。

このランキングから、世の中変わったがそれでもテレビ好きが多く「近頃のテレビはつまらない」といった識者やオジサン世論への反証だ、などと言う気はない。そうではなく好きか嫌いかわからないかの個人の好みを超えてテレビというものは帰ってくれば無意識のうちにつけてしまう、どこか頼りなげな、それでいてしぶとい存在なのだ。

「たのしみは妻子（めこ）むつまじくうち集いあたまならべてテレビ見るとき」。橋樑見の本歌取り戯れ歌だが、そんなテレビ風景が遠くなつて50年経った。当事者であるわれら放送人の「青春」でもあったが「こんなはずではなかった」という眩きもまじり屈折した影の彼方で、放送そのものは問いを続けてやまない。

(M)

02 放送人グランプリ  
特別賞 石橋冠氏受賞パーティー  
(11月30日 於「紅い花」赤坂)



杉田成道さん 鶴橋康夫さん



石橋冠夫人



石橋冠ちゃん & 余貴美子さん



西田敏行さん



今野勉氏

# リレー放送現場史

## 傍目八目

北村 美憲

わたしがテレビの衛星伝送に関わったり外国の特派員をやったりした20〜30年前を思えば、情報通信技術の発達による昨今の便利さには、格別の感慨を覚えずにはいられない。だがこれで世界のことによりよく伝わるようになったかとなると、それは大いに疑問だ。世界には、日本人の通りの常識では捉えようもない現実がいくらかもある。通信手段の進歩発達で、世界の動きがそのままに伝えられることなど、まず絶対がない、特にマスメディアにおいておや、である。いや便利になっただけ却ってありきたりな「常識」の先入観が邪魔をする。地球の果てではない米中ロ、EJなど世界の主要な動きについてさえ同じだ。

動のものにしたい。そこで負けるはずのないイラク相手の勝負に出て親の仇も討ちたい。……

せいぜいその程度のものである。先の中間選挙で「歴史的勝利」をおさめていよいよ歯どめがきかなくなつた。

だが、大統領選挙の投票率が40%、中間選挙にいたっては34%。3人に1人しか投票所へ行かない、これがアメリカン・デモクラシーの実態である。米国内でさえ、ブッシュとその取り巻きのやり方とうんざりしているのが半数以上いる。

だのにそれを、新たな「バクス・アメリカーナ」、三十年戦争(一六八〇〜四八)の後で近代国家の枠組みを定めたウエストフリア体制の終焉で、新しい中世の到来などとオダをあげてるのが日本にもいて、ブッシュのイラク攻撃のお手伝いをどうしたものかと日本政府が右往左往。こんな愚かなことをびしやりとやる論評がない。

中国共産党が第十六回大会で指導部の体制を入れかえた。政治局常務委員を七人から九人に増やし、ただ一人再任した胡錦濤(59歳)がナンバー①になった。これはこれで順当だし、江沢民の76歳から17歳の若返りは結構なことのように見える。だが新体制で胡錦濤より若いのは李長春だけ。二人も枠を増やしながら40〜50代前半が1人もいない。ちなみ

に胡錦濤が常務委員になったのは49歳の時だった。

九人のうち五人までは江沢民の元部下か江に取り立てられた者だ。なかでも怪しいのがナンバー④の化賈慶林(62歳)で、福建省党委員会書記時代に起こったアモイ遠華会社の巨額密輸事件には夫人の林幼芳が関係していたとされる曰くつきの人物である。それを江沢民は北京の党委員会書記に抜擢し、ついにトップの座に据えた。あの事件を問いつめたら江自身にも累が及ぶ裏があるのだからと専らの噂らしい。ナンバー⑤の羅幹(67歳)は李鵬の側近で、これは李鵬を説得するための工作の結果だろうと言われている。

一方で胡錦濤ときわめて近く、江とともに鄧小平に抜擢されて江のライバルだった李瑞環(68歳)がいなくなつた。これを江沢民の「院政」だという解釈もあったが、こんなことで院政が敷けるわけがない。善良ではあるが凡庸で小さな支配者がきまつて犯す姑息な失敗である。駄目になりかかった会社の役員人事によく似ている。

大会当時、中国に行っていた人物から聞いた話だが、党大会と新指導部について、上海で尋ねると「知らないね。あんなもの北京の奴が勝手にやっていることさ」と言い、北京で同じ質問をすると「なに、上海から来た奴が勝手にやっていること

で関係ない」という返事が返ってきたという。

日本にかぎらない。人間の世の中とはおよそこういうものである。だがそれでも人々の暮らしは続き時代は進んでいく。その人達の日々の営みが、やはり歴史を作る。放送がその現場にどこまで「立ち会う」ことができるのか、もう少しは関わり続ける時間がわたしにもありそうである。

### お知らせ

放送人の会ラジオ部会たちあげに際し、『平成ラジオ塾』とのコラボレーションを紹介します。

第6回 平成ラジオ塾研修会

1月24(金)〜25(土) AM10

於・放送ライブラリー(横浜市)

10F会議室。

・番組事例研究「最上川とわたし」(山形放送) 講師・山県昭彦

・番組事例研究「落ちた不死鳥」(宮崎放送) 講師・紫安伸一(宮崎放送)

・山梨放送のラジオソフト開発〜02年度民放コンクール3部門制覇の背景」講師・児玉久男(山梨放送)

・ラジオ制作部長)・パネルディスカッション(右記紫安、児玉両氏、石井彰、松尾羊一(司会)山県昭彦。

☆ 傍聴を歓迎します ☆

# 南船 北馬

喜劇について

滝 大作

先代の渋谷天外さんに、奈良のご自宅で喜劇に就いてあれこれうかがったことがあった。その言葉は単純にして明快、それでいて一語一語が含蓄に富んでいて、あれ以上の喜劇論をその後聞いたことがない。

まず、こういう言葉があった。「涙は汁粉に落とすひとつまみの塩である」

余計な解説を加えると、ひとつまみの涙が喜劇の笑いをより増幅させるという意味だ。天外さんは、その後で一言つけ加えた。「寛美は塩が多すぎる」

次の言葉は喜劇の本質を見事にとらえている。

「喜劇は人間関係である。人間関係を通して人の心を描くのだ」

若い頃の私は、ギャグを連打する

ナンセンス喜劇が最上のものと思っていた。チャップリンより、キートンやマルクス兄弟派だった。だがいまはちがう。心の裏付けのあるチャップリン的ギャグは素直に笑えるが、ナンセンスはノーだ。あんなもので笑うのは、子供と脳天気な大人だけだと憎まれ口を一言。

そして天外さんの結論はこうだ。「喜劇はどんなテーマや時代背景であつても、いまだなければならぬ。そのいまでも、ただいまのいまだある」

これは喜劇だけでなく、ドラマ全般にいえることだろう。近頃のTVのドラマや劇場の演劇が暇つぶしのネタでしかない原因は、そのただいま性がまったく欠如しているからだ。彼らを感じているいまは、遙か後方に置き去りにされた過去の残影に過ぎない。TVドラマや劇場の演劇を見る度にじれったい思いがする。

ただいま性をつかまえるには、社会現象や風俗を追いかけても駄目、何故そういう現象が起きているか、その底にある暗黒の構造を見抜くことだ。そのためには、まったく新しい角度からものを見る眼が必要だろう。私は、人間という立場を捨ててゴキブリの眼で世界を見ることにしている。そうすると、正義を振り回すアメリカという国家の正体もはっきり見えてくる。

それにしても、天外さんはすごい

喜劇人だった。

孤独

下重 暁子

歌舞伎座で忘れられぬ舞台を見た。梅津貴昶の会である。梅津流の家元で知る人ぞ知る素踊りの名手である。団十郎、勘九郎、玉三郎などの振付けでも知られ、その日もこの三人に加え富十郎、菊之助、若太郎が賛助出演という豪華さ。最後の「吉野山」は勘九郎の静御前、梅津貴昶の忠信、静御前は美しい衣装だが、忠信は素である。二人のかもしれない出ず空気がやがて忠信に集中する。静寂、品そして軽み、一瞬の狐の動きの切なさ。「無」の境地といつていい。この瞬間そこに居た幸せを思う。

梅津さんの踊りは好きですつと見つけてきたが、こんな感動ははじめてである。申し訳ないが、団十郎、富十郎、玉三郎、勘九郎の名優たちの踊りは消えて、眼前に浮かぶのはあの時の忠信である。

機会があつて梅津さんに四年前から地唄舞など教えていただいているが、こんな人に直接教えを乞うことの出来る幸せを思い、私もつと真剣にやらねばと反省させられた。

「たぶん母が亡くなったから……」

今年（二〇〇二年）の元旦に亡くなった母上への追善の意もあり、その覚悟が出たのかもしれない。

「沢山の方からそうしたお手紙をいただいたけど、自分の踊りは見られないのね。いい空気だったことはわかるけど、踊り手は孤独なものよ」

梅津さんが振付けをした武原はんさんもそういつていたという。

ビデオは踊りを写しても空気を伝えない。似て非なるもので、踊り手は決して自分の踊りを見ることが出来ない。踊りに限らず、音楽、演劇、スポーツ、全てのライブはいかに素晴らしくとも本人は見ることが出来ない。見る側にしても二度と同じ空気に触れることは不可能である。テレビの舞台中継などは劇場で見るのとは別物と思わねば空しい。

## 放送界多頻語彙典 抄

（無藝春秋社刊）

おっかけ 「名」局舎前に群がるギャルを指す。獲物が裏門から消えるると一斉に「ウッソー」と悲鳴。主に台場や赤坂に棲息するヒト科オヤフコウ目の害鳥。「解」人気度の目安になるとエサをあげる業者もいて警備員室は絶滅対策に苦慮している。

イケメン 「略」ベツカム様ディカプリオ様拓哉様窪塚様秀明様等々を指す「俗」眉、目、口元などの具がバラバラなのはツケメンである。

手直し ワイドショーの新任Pがマンネリだと番組をいじること（女

## 放送人の証言

提案と収録に当たつての雑感

各務 孝

本来ならば、今回から「放送人の証言」の収録のあらましを久野さんが毎号連載される予定でしたが、久野さん急病のため、急遽私がショートリリーに立った次第です。と言っても、私が収録に立ち会った方々は七名に過ぎませんし、収録内容を聞きなおし、発言内容を正確にお伝えする時間的余裕ありませんでしたので、今回は私の乏しい収録体験の一部をご披露すること、それを通じて私が感じたこと、また、この先の「証言」の提案、収録に際しての参考材料を提供することに止めさせていただきます。

先ず、私が「証言」を頂きたいと考えた方々の選択基準は甚だ恣意的でして、私の個人的興味、関心からのものが多く、放送史上の位置付けやネームバリューは顧慮しませんでした。

例えば、今回の収録中の最高齢者93歳の柳沢恭雄さんなどは一面識

もない方でしたが、たまたま読んだ「戦後放送私見」が面白かったのと、1960年に日本電波ニュースを創立し、東側、特にベトナム報道などで画期的なニュース配信を世界中行なつてこられた先駆性に惹かれたからでした。当時から日本電波ニュースの存在は知っていましたが、どうせ、日本共産党の息のかかったニュース会社ぐらいの認識しか無かつた私としては、報道の自由のために共産党はおろか革命団体からの援助は一切受けなかつた、と柳沢さんの口から直接伺い、目から鱗でした。今ひとつ、私の選考基準には私のマイナー指向が働いて居るかも知れません。

例えば、効果マン出身で、今尚ラジオの「盲人の時間」の制作に携わつておられる川野楠巳さんの番組を開かれたことのある会員は殆どおられないと思います。視聴率万能の世界にあつて、視聴率ゼロに近いこの番組は、しかし視覚障害者にとつては絶対的な存在です。視覚障害者の方々にNHKの会長の名を知らぬ人でも川野さんの名を知らぬ人はいないと報じられた所以です。

しかも、ディレクターにとつて決して魅力的とはいえない福祉番組の制作に長年携わることを通じて、川野さんは目の見えない人々の世界、暗眼者には会得できない世界にまで想像の翼を伸ばし、数々の芸術祭賞

を受賞したラジオドキュメンタリーを何本も作つてきました。そして、それは、ゴゼの人々や琵琶盲僧の苦難と差別の歴史と文化の発掘の仕事に繋がつて行きました。

勿論、私とて、テレビドラマやドキュメンタリー、いわゆるメジャー番組に関心がないわけではありませんが、前号の「証言」の現状報告の中で久野さんが民放のドラマ関係の証言に比べ、NHKのドラマ関係者の「証言」が少ないと指摘しておられ、また、その通りなのですが、これには私のマイナー指向も与つているとは思いますが、今ひとつ、私のような世代の者が聞き手になると、どうしても楽屋落ちの話になり勝ちなのを怖れる気持ちが働いていることも否めません。しかし、そう身勝手も言つてはおられません。今年NHKドラマ関係者の証言をほとんど収録する予定ですので、現役の会員のの中から進んで、このディレクター、プロデューサーに聞いておきたい、盗めるものがあれば盗んでおきたい、といった志のある方はNHK、民放、プロダクションの方を問わず、ふるつてお申し出いただければ幸いです。

また、番組の知名度や人工に膾炙している点から考えても、テレビドラマやテレビドキュメンタリーの証言者が多くなるのは当然ですが、それを支えてる撮影、照明、美術、効果、T D関係者などの証言が、もつ

子アナ交替程度しかできない。」「転」専属タレントのギャラアップ要求のジムシヨ側やレポーター、構成作家に対し契約解消でオドカす際の有力な武器が手直し宣言。

ロケベン、ロケ先弁当のこと。大増、翁、鳶屋など老舗弁当で喜ばずのが実力派P。コンビニのシャケ弁ばかりだと当該屋ドラの視聴率はあぶない。予算をにらみ新規開店のイタメシで評判を取るADは出世が早い。石井ふく子氏自家製の「ワタおにぎり」は大好評だが、これはロケベンでなく内ベンと呼ぶ。

内トラ エキストラを内部調達ですますこと。予算緊縮でCPが急遽「内トラで行こう」とADに命令すると、タダ働きのADたちは打ち上げで大トラに変身するので要注意。

とあつてしかるべきでしょう。またいささか我田引水めきますが、今回取り上げさせていただいた川野さんのように、目立たない番組や研究開発を地道にやつてこられた方々のお話も記録にとどめていきたいと思ひます。止むをえぬこととは言え、幹事会のメンバーが東京に偏つていて、東京中心の発想になり勝ちです。地方在住の会員の方から、自薦他薦を問わず、是非これだけは話しておきたい、聞いておきたいといった趣旨の提案をお待ちする次第です。

# 2003 新春随想

## ドラマ的なるものの五十年

鴨下 信一

ほうぼうのTV局が五十周年を祝ったが、二十一世紀のデジタル多チャンネル時代に入ったテレビの行く方は、いぜんはつきりしない。こういう時には温故知新ということであらためてテレビの歴史をふりかえってみようという動きが、にわかには盛んになったかに見える。

A新聞は編年体でテレビ史を連載するという。一回目は1954年の予定で、当然街頭テレビとプロレスが題材になるだろう。で、そのプロレス・野球を持たないTBS（当時KR TV）が翌1955年にTVを開局するのだが、対抗策としてドラマに力を入れることになる。このことについて取材をしたいと申し込みがあった。

以前からずっと考えていることだが、このようにTV局とTV局の間の競争、TVの内部同志を較べることでテレビ史を考える方法は、もうあまり果実を産まないのではないだろうか。

たしかに、その後AドラマのTB

SVとなったのは、巨人と力道山を持たなかったからだ。では何故先輩たちは他のスポーツでもなく、音楽でもなく、バラエティーでもなく、ドラマを選択したのだろうか。

テレビの中で話を進めてゆくと、こういうことがわからない。世の中はべつにテレビだけではない。演劇も映画も小説も、さまざまな文化、多彩なアミューズメントはこの時にも存在した。いや盛況をきわめていた。このことは54年に俳優座劇場、55年に東横ホールとたてつけに劇場が出来たのでもわかる。小屋が足りないほど活況だったのだ。いわゆる新劇三大劇団（俳優座、文学座、民芸）、歌舞伎、商業演劇は「セールのスマンの死」初演、東宝歌舞伎第一回公演、新劇三大劇団合同の「かもめ」と華やかに舞台を飾り、四季、青年座、新人会、仲間などが続々結成されていた。

映画は非常にドラマ的だったといっている。二十四の瞳「近松物語」「宮本武蔵」(54年)「警察日記」「生きものの記録」「野菊の如き君なりき」「女中ツ子」「血槍富士」「浮草日記」「新・東京物語」(55年)とも挙げきれない。「七人の侍」「生きる」「山椒太夫」が海外で賞をとり、

東映の二本立て興行は「笛吹き童子」等で大成功、ひばり・チェミ・いづみの三人娘もの、「ゴジラ」と、この時代の盛況だったことの証拠が並ぶ。A非常にドラマ的だったVというのは、こういうことだ。

十年後の1965年の映画を見てみよう。「飢餓海峡」「つぼん泥棒物語」「ブワナ・トシの歌」「証人の歌」等いずれも実際にあった事件をもとにしている。「赤ひげ」だって小石川療養所という実在のものがモデルだ。つまりAフィクションとしてのドラマ性Vがいちじるしく後退しているのだ。それと「昭和残侠传」「明治侠客伝」等のカテゴリーは過去作品のリトルルドに属している。ここでもオロジナルなドラマ性を創出する能力はひどく減退している。

もし十年後にAプロレス・野球Vに対抗するプログラムを探していたとしたら、ドラマということになっただかどうかは本当にわからないだろう。世の中がAドラマの時代Vだったから、そのことはなし得た。

ということとは、この時代はAフィクションまでが信用されていたVということだ。フィクションでA社会を知ることVが出来た。すなわち小説の黄金期だった。

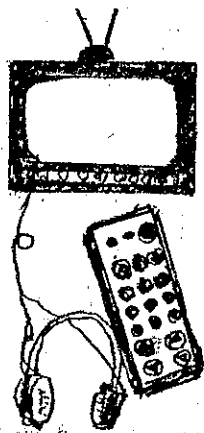
三島由紀夫、山本周五郎、武田泰淳、石川達三が続々作品を発表し、吉行淳之介、曾野綾子、小島信夫、庄野潤三が登場した。石原慎太郎「太

陽の季節」は55年の芥川賞である。そして剣豪ものの流行。これが65年になると岡村昭彦「南ヴェトナム戦争従軍記」大松博文「おれについてこい」池田大作「人間革命」がベスト・セラーだ。小説というスタイルをとついても山崎豊子「白い巨塔」井伏鱒二「黒い雨」を見ればフィクションという言葉がもう通用しないことがわかる。

KR・TVの、ぼくの先輩たちの選択はこうした時代の文化的背景が後押ししている。

紙数がないから書けないが、ちょうどこの頃はA共通日本語Vが成立しかかった時代だ。後に司馬遼太郎が明解に定義する「ベトナム戦争のことも、食事のことも、恋愛も、同一の言葉で書ける」文体のことだ。実は同じように「現代劇と時代劇も、シリアスも喜劇も、同じ言葉で足りる」ようになった。このことがドラマ隆盛をもたらしたことを忘れてはいけない。

テレビはテレビの外にもつと目を向けるべきだ。その歴史を語る時にはなおさらテレビの中に閉じこもるまいと思う。



# 録音構成ひとすじ四十余年

山県 昭彦

あれは1936年の夏、ある真夜中のことだった。小学2年生だった。蒲団の上に身を起し、刻の到来を待っていた。眠たい眼をこすりながら、それでも子供なりの興奮をしていた。

刻が来て、放送が始まった。フェーディングに加えて雑音の交錯。何が何やら、自然、聴き耳を立てて行く。

と、その雑音の中から、上ずったアウンサーの音が飛び出してきたのだ。

「前畑がんばれ、前畑がんばれ……、勝った勝った、勝った勝った勝った」  
眠気からすっかり覚めた少年の脳裡には、さまざまな事象が一気に浮かんできてひろがった。

前畑秀子力泳のさま、ゴール前接戦のさま、抜き去られたゲンネル選手のさま、オリンピック・プールという大舞台のさま、行ったこともないベルリンという異国の街のさま。その時ラジオは、間違いなくテレビジョン（遠く物が見える）だったのである。

さて戦後1951年、民放ラジオが発足し、あの小学生は駆け出しの放送作家になっていた。

程なくラジオは音声録音し、蓄積する技術を得て、録音構成という新しい番組形式を誕生させた。

当時のある日、一人のディレクター

と私は、閉鎖した炭鉱の社宅街にあって。ディレクターはデンスケを肩に吊るし、黙々と歩いて行く。道には廃炭が敷き詰められており、踏めばサクサクと小砂利のように鳴る。

社宅は板造りの長屋形式である。ディレクターはデンスケのスイッチをONにしたまま歩を進め、一軒一軒訪ねて歩く。転居して留守の家も多い。

はじめ私はディレクターが、なぜテープを回し放して歩くのか理解できなかった。当時の録音テープは貴重品で、継ぎ剥ぎだらけの使い回しは日常だったし、電池は電池とてすぐに切れてしまう状態だった。テープはちびちびと使い、必要以外のスイッチは寸秒を惜しんでOFFに戻しておくのが原則だった。

それでもディレクターによる原則無視の取材意図を、私なりに理解し、諒解して構成に当たった。

自分たちの足音や、コツコツと戸を叩く音。わずかな在宅者によるインタビューの声や、ズリ山で遊ぶ子供たちの喚声。ナレーションは押さえて控えるに徹した。

するとどうだろう、閑散とした炭鉱社宅街が、千万言を費やすよりもくつきりと、一枚の絵として見えてきたのである。崩れかかった屋根の上には妙

に張り詰めた青空がひろがり、その青さがむしろ心に痛い。

ここには「前畑がんばれ」放送に通り底する世界がありそうだ。

この番組で開拓し、使われた技法の一部は後年（ON移動）とも呼ばれ、ラジオ技法の宝とまで言われたが、戦後開拓された技法群が、ほとんど継承されずにいることを、惜しい、と私は思う。

5年前に有志らと語らい、「平成ラジオ塾」という制作者研修機関を発足させた本旨も、実はここにあったのだ。とまれ、先の湾岸戦争の折り、テレビがミサイル攻撃による戦闘場面を、そのまま生中継していることに驚愕した。近々私たちは隣家の火事や惨劇さえも生中継で平然と眺めていることになるのではないか。

今はテレビもラジオも、受け手との距離感、方向感を喪失してしまっているらしい。それは情報の本義の喪失につながるかならないかと私は考える。ラジオを愛している私は、今こそラジオについて語り、行動したいと念願している。

（平成ラジオ塾代表）

## 忘れられぬ一言

・「ほんによう聞きに来てくんなきった。私などのコツば放送で言うてくたさい。ホンのコツばどうぞ言うて聞かせてください、おねがいします。どうぞ、おねがいします」。1959（昭34）年「録音ルポルタージュ」（ラジオ東京）担当Dとしてデンスケを担いで熊本県水俣の港で地元漁民にインタビュー、そのときわたし自身が耳にしてテープに収めた言葉である。黒々と日焼けした顔に深い皺を刻んだ港の人たちがマイクに向かい、入れかわり立ちかわり語り、手を合わせて拜んだ。その時の身のすくむような想いはいまも消えない。

当時マスメディアは、まだそれほど頼りにされ、信頼されていた。

（北村美憲）

・「われ事に於いて後悔なし」（宮本武蔵）  
・「浜の真砂は尽きるとも世に盗っ人の種は尽きまじ」（石川五右衛門）  
・「一人殺せば犯罪者で、百万人殺せば英雄か」（C・チャップリン）  
・：座右の常套句です。（荻野慶人）  
・ワイマール体制崩壊を目撃したトーマス・マンは呟いた「政治を軽蔑する者は軽蔑に値する政治しかもてないものだ」。テレビ50年、マン氏を借りれば「テレビを軽蔑するものは軽蔑に値するテレビしかもてない」ということになるのか。（松尾羊一）

◇別掲で「第6回 平成ラジオ塾」研修会の内容を紹介しました。

# 某月某日 現場発

五島列島にて

鶴橋康夫

一月十二日

悪い夢を見た。医者からガンだと言われている。僕はヘタな俳句を詠むことで気を紛らわせている。

- ・喪失の恐怖道化の華となり
- ・棒だけの稲架黒々と鳥のせ
- ・空一度裸になる日冬がきて

五島列島にいる。風にころび、潮に濡れている。山道で車に酔った。飛び出した野犬に助監督がブレーキを踏んだ。横になっていた僕は、座席の隙間に挟まれ、眼鏡が割れた。

岬の断崖に、けもの道があった。「監督が通ればどんな役者でも通れますよ」と制作主任。モルモットか僕は、と思いつつもロッククライミングに挑む。渡り切ったら膝が笑ってる。二三口を呑んだが止まらない。

福江島半周で日が暮れた。道に迷った。宿に着いたら深夜だった。何十年やってもロケハンに進化がない。切実さがあるだけだ。

船戸与一原作『龍神町龍神十三番地』を撮ろうとしている。犯罪への夢想、埋み火にも似た密かな執念を描く。不義不貞白い素足に夏の蝶。蟹騒る女の膝の乱れける。半夏生尻に夕陽の女いて

山本夏彦さんが、人の盛りは五年、大負けに負けて十年だ、という。確かにオリンピックの選手は、過去千年二千

年の記録を全身に覚え込ませて、その盛りは僅かだ。英雄豪傑、経営者、みな例外ではない。平家の興亡二十年、あのヒットラーが十二年。

僕のテレビは、一陣の風、一瞬の花吹雪であった。盛りもなければ旬もなかった。他に転じる才能もなければ浮き沈みもなかった。

ふと思う。盛りを持った人たちが、このテレビジョンを支え繋いできたのではないかと。

だから僕も、ひたすらの切実さを越えた、次に繋げるための盛りを用意しなければならぬ。自分の心身に溜め込んだ全ての毒を吐き出して。

- ・なんかこう命をかけて花林檎
- ・紋白蝶生かされて日脚伸ば
- ・処女地行くひつじ空翔ぶ葦の穂祭

### 会員近況

先夜、パリ在住の映画監督津田通夫氏の3部作『メルシー』（主演・藤田敏八）7月13日（同・笈田よし）

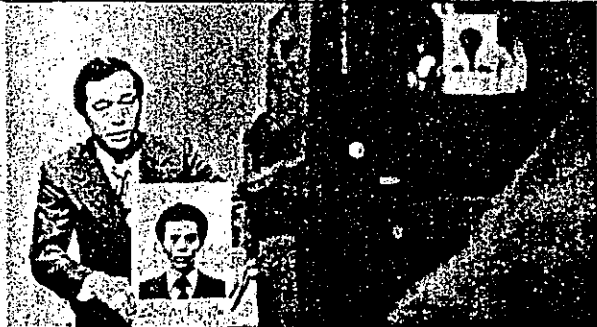
『ノン・メルシー』（同・小林薫）の上演会（於・広尾『コレド』）があった。劇場

やホールには無いアンティームな雰囲気は湯布院映画祭風。帰国中の津田監督と観客の語り合いを眺めて主催者の桃井章氏は、この関係をリエゾンと呼んでいた。コ・オペレーションやコラボレーションとも一味ちが

うリエゾン運動はテレビ制作者版も考えられるのではないか。（M）

### 一枚の映像

北京は王府井裏通りの本座で求めた映画物語断片 邦名『人間の証明』（中国名『人証』）の一齣に若き露木茂氏のスチール。無断使用らしい。



富士電視台記者が、富木茂氏を北京に招き、このスチールを撮影した。富木茂氏は、1950年にニューヨークで生まれた。このスチールは、1950年に撮影された。富木茂氏は、1950年にニューヨークで生まれた。このスチールは、1950年に撮影された。

一枚の映像あるいは「既視辺のアルバム」風な、手持ちの本邦初公開的貴重写真を募集しております。

### 会員募集!

問い合わせ・連絡先  
0322110019まで。

### 編集後記

◆編集部の悩み。年号や年齢の表記は難しい。三年を3年、二〇〇三年は2003年。さすがに二千三年派はいないが、五十四歳か五四歳か54歳か、54歳でもいいのか。「おれは54ではない。馬券じゃあるまいし」と怒る会員もいるにちがいない。二十一歳を二一歳とすると三に見えてしまう。十一番地を一一番地と十（ト）抜きで書く二番地と見間違え、配達人は猛犬同様悩みのタネだ。といっているいちいちをいれる昔表記はわずらわしい。困った、困った。縦書きと横書き文化混在の矛盾か。

◆「ウインドウズ系は54と出すのが面倒くさい。そこで54としちゃう」と雅浩氏。そこえゆくとワープロは全角・半角が自在で忽ち54歳と出る。パソコンは青い目育ち、ワープロは日本語育ちの違いか。ところでセイコの変換の最初が「聖子」とでる機種があるがなぜだろう。雅浩、すこしも慌てず「家庭用ワープロに取りこんでいた当時の技術者が松田聖子ファンだったのだろう」松尾「……？」

◆石橋冠さん提案の一般会員交流の場、「サロンド・放送人」。毎月の最終週の火曜日あたりを目安に世話人会をもったら如何でしょうか

◆つくばねのゆき交う音や五十年（松尾）



会員各位

2003年1月15日

「放送人グランプリ」準備担当プロジェクト

「放送人グランプリ」03ノミネート依頼

拝啓 時下ますますご清祥の段、お喜び申し上げます。

日頃は大変お世話になっております。

さて、今年も「放送人グランプリ」ノミネートの季節となりました。

昨年の第一回では、おかげさまで多くのノミネート投票が集まり、第一回にふさわしいすぐれた人々を選ぶことができ、手作りの簡素な贈賞式ではありましたが、受賞者の方々も喜ばれ、放送のありようを考える豊かな時間をもつことができました。

今年は、さらに充実させたいと考えておりますが、何といたっても時代を見据えた的確な贈賞をすることが賞の権威を築くために最も重要なことであることは変わりありません。

そのために、会員各位の豊富な経験と高い見識を生かしたノミネートがまず必要です。

ノミネート用紙を同封致しましたので、次の要領（昨年と変わりません）で期日までに候補者のご推薦をお願い申し上げます。

1. 贈賞の対象は、主として02年1月から03年1月までの一年間で、テレビ、ラジオの企画・制作・演出、技術・美術などのスタッフ、編成、調査、研究、評論、など放送にかかわる活動のなかで最も顕著な仕事をしたと思われる人

2. ご推薦いただく候補者は、グランプリ候補・1名（個人またはグループ）とその推薦理由。ほかに、贈賞したい人（またはグループ）の名前、理由、適当と思われる賞のネーミング（特別賞、奨励賞、など自由に）2名程度をお書きください。

3. 締め切りは、03年3月31日まで、です。

放送人の会事務局へ、FAXまたは郵送、あるいはメールでも結構ですのでお届けください。誠に恐縮ですが郵送料はご負担をお願いします。

4. ノミネートすることができるのは、放送人の会の会員に限りますが、対象者は会員に限られません。出身母体やジャンルなどにこだわらず、広い視野でお考えください。

5. 選考は、ノミネートの結果を土台にして、選考委員（川口委員長・5名）の討論で内定し、幹事会で承認、という昨年同様のプロセスで決まります。今年度の選考委員のメンバーは1月幹事会で決定される予定です。

以上

## 第2回「放送人グランプリ」ノミネート用紙

	会員氏名
<p>グランプリ候補者名と推薦理由（スペース不足の場合は別紙添付してください）</p> <p>ほかに、贈賞したいひとと推薦理由、賞の名前（特別賞、奨励賞など自由にネーミングを）</p>	